

肥料商の新たな機能を目指して

～平成20年度三菱アグリ児藤会の報告

「肥料価格の高騰、肥料商としてこの局面をどのようにして打開していくのか？」そして農家は「農産物価格に生産資材費高騰をどこまで転嫁できるか！」について研究する会として、去る7月7日熊本市の(株)児藤商店は「平成20年度三菱アグリ児藤会」を熊本交通センターホテルにて32名が参加して開催した。

新肥料年度を迎えて「従前の肥料商では経営が立ち行かなくなる」との危機感を持った肥料の販売店が「肥料商が脚光を浴び始める時」と題した基調講演；講師当社 上杉社長の講演を熱心に聴講した。テーマは、肥料原料価格の高騰は一過性のものではなく、世界のファンダメンタルの膨張によるものである。世界の食料・農業を巡る環境の変化は肥料の生産、流通に変化を及ぼしている。農協の主たる流通形態である青果市場流通、米流通にも大きな環境変化が起きている。昨今の食品会社の不祥事発生による消費者の不安は、大手流通業者の安全・安心戦略に変化を及ぼし国産志向とJGAPの普及にと加速してきた。過去の諸農業振興策も変化して、農商工連携した農業ビジネスモデルが必要とされている等、熊本県の農業を振興するケーススタディの提示があった。このような色々な面での環境変化の時機を捉えて肥料商が取るべき「10の行動基準」の紹介があった。(注)10の行動指針は、信濃鉄道、埼玉高速鉄道の経営改善指針



10の行動基準

1. トライ&エラー
2. 実力主義
3. ワイワイ・ガヤガヤ経営手法
4. 変化価値論
5. 自信と勇気
6. Yes I Can
7. ダム詰め
8. 明るく元気
9. 原因自分論
10. あいさつ日本一

参加者との意見交換

肥料価格の高騰の原因や情勢は理解でき農家に対する説明はできるが、これから高い肥料を買ってくれるか心配だ。

価格を抑えるために農協が取り組むPKの低い成分の新肥料には、使い慣れた肥料を変えることに農家は非常に不安に思う。

児藤商店がやっている土壌分析でもって土壌診断に基づく施肥設計をたて、農家と一緒に従来品の品質、収量を上回る結果を出す努力を積み上げることが、生産費高騰の対策である。

農産物を買ってくれるお客さんの信頼を得るために、JGAPに取り組む必要性が良く理解できたJGAP指導員はこの会場にも9名いるし、8日からは全肥商連九州支部の肥料屋さんの121名がJGAP指導員研修を受講する。

JGAP認定圃場を早急に増やすため肥料商が活躍するときだ。そしてGAPに取り組むことは農家の経営改善のみならず、肥料商の経営改善や社員の意識改革に役立つ。

安全・安心な農産物であっても、美味しさや機能性成分(栄養価)が豊富である必要がある。

天気や気温に左右されないで安定した栽培のためには、肥料だけではなく日々の栽培にも肥料商は関与して、安全で高品質農産物の多収穫を目指し、農家の経営が豊かになり、その結果として農業後継者問題が解決できる。(次ページへ続く)

(前ページより続く)

児藤商店が今年から取り組んでいる事例を紹介。「消費者が望んでいる品質の農産物を生産して、お客様の喜びを自分たちの喜びとして共有しましょう」をスローガンにして、農家と一緒に美味しいトマト栽培と硝酸濃度を落としたハウレン草栽培事例を紹介して、丁度初出荷するトマトを試食してもらった。3時間に及ぶ講演と活発な討議、色々な意見交換を交えながらの懇親会、出席者の益々の健康と発展を祈念して三菱アグリ児藤会を閉会した。

革新的農業 「アグロ・イノベーション(Agro-Innovation)」 2008開催

13回目を迎える農業ビジネスの展示会、アグロ・ビジネス イノベーション2008 がリニューアルして幕張メッセ国際会議場：コンベンションホールで、7月16日～18日の3日間(入場者40,828名)開催された。農業分野の人材交流と技術移転を促進する場として、施設園芸技術展、農産物流通システム展、アカデミックスクエアにおいては、農学系大学(研究室・学部・大学院)、農学系研究機関の展示会と併せてまた、展示会場の特設会場では、食の安全と農業生産、食品流通農産物のマーケティング、環境対応技術、生産施設・技術の革新等のテーマで、セミナーも開催された。



日本の農業技術の進歩は目を見張るものがある。植物育成用ランプ、LED(発光ダイオード)、メタルハライドランプの人工光源や、遺伝子組み換え技術による飼料用医薬(大葉やイチゴ、タバコの葉を活用)、温暖化に対応した革新的な農業生産技術や、地球温暖化防止技術等の関連技術、バイオマスの利活用、省エネ技術など、日本農業の技術力は世界的にもトップクラスであろう。この省エネ技術や革新的技術を国内ばかりでなく、ODAでアフリカやアジアの途上国へ食料生産自立に役立てることで世界貢献できる時期もそんなに遠い将来では無い。その際省庁を超えた連携が必要であろう。また、最近問題になっている海外での日本名の商標登録、日本固有の品種の登録、技術の特許申請など農業知財を守ることの喚起も必要である。

土を・根を・作物を・守る肥料を製造 - ときわ化研(株)

エムシー・ファーマティコムの子会社にときわ化研(株)がある。良質な動植物有機と無機鉱物を混合、たい積発酵させたもので、微生物性、有機性、無機性を強力に発揮し、地力の3要素(物理性・生物性・化学性)をマルチに高め、秀品多収をもたらす、「多機能資材」を製造している。完熟堆肥の特殊肥料や、普通肥料として汚泥発酵肥料の生産をしている。原料の分析は商品が発酵し終わるまでに原料ロット毎に分析し、品質のチェックは万全である。

農産物の安全は、残留農薬だけではない。堆肥の中の有機物から違法な農薬が残留したり、汚泥肥料から重金属が検出されたりする。有機物としての堆肥や特殊肥料などの中味、原料のチェックが重要である。原料ロット毎のチェックは大変なコストが掛かるが、安全優先、作物を守るのがときわ化研のポリシーである。商品の在庫管理をみても大事に商品を扱って在庫しているのが分かる。単なるパレット積みではなく、一段ごとに荷痛みしないよう棚に積み上げ、製造月日が表から分かるよう表示してある。先入れ先出し、古い在庫は出さないようにしている!



いよいよ関東地方も梅雨が明け暑さも本格的になり、日本列島では36度を超える場所も。そんな時は昔ながらの「打ち水」で涼を感じるのはいかがでしょうか。ただし、水道水はご法度。2次利用水を。

編集局長：小田原次洋 アシスタント：助川尚子